Research Institute for World History
Newsletter
No. 24 February 2015

CONTENTS

■「アジア諸国における世界史教育の歴史と現状の比較研究」第 1 回ワークショップ報告 —— 1 頁
■「世界史の中の日本・日本の中の世界史」を求めて ——研究会「歴史家工房 21C」の発足 —— 4 頁
■ RIWH アフリカ奨学基金第三期のご寄付のお願い —— 5 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/
世界史研究所「ニューズレター」第 24 号（2015 年 02 月）

「アジア諸国における世界史教育の歴史と現状の比較研究」第 1 回ワークショップ報告

世界史研究所事務局

昨年 11 月 28 日から 30 日にかけての 3 日間、三菱財団助成プロジェクトである上記表題のワークショップが、本研究所会議室で催された。インド、インドネシア、韓国、シンガポール、中国、フィリピン、ベトナムに日本を加えた 8 カ国の研究者が一堂に会してアジア各国の世界史教育の実情について情報を交換し、議論を重ねて相互の認識を深めるたいへんに貴重な機会となった。

ワークショップの様子

本研究所では 2004 年の発足以来、中等教育機関における世界史教育のあり方に深い関心を寄せてきた。周知のように「世界史 A（ないし B）」は高等学校の必修科目であり、日本国民の多くが有する一般的な歴史知識や概念の基盤となっている。そのため、研究者のみならず、検定教科書をムページやニューズレターに寄稿いただき、いま世界史教育が抱える問題点を歴史的経緯も踏まえて考える、関係者が広く共有できる場を提供しようと努めてきた。同時にまた、1980 年代以降に各国で活発化した世界史研究の動向を適宜紹介してきたが、2008 年の「アジア世界史学会 (AAWH)」

創設を機に、アジア各地の研究者との連携も急速に進むようになった。

様々なテーマをめぐって報告・討議がなされる AAWH のなかで、アジアの歴史家が等しく直面する根本的かつ困難な課題のひとつは、従来のヨーロッパ中心の世界史像からの転換とアジアを主体としたそれの構築である。ところが、その可能性をめぐる意見交換の過程で、実りある議論にとって不可欠な、各国の世界史教育の歴史と現状にかんする基本的な知識が共有されていないという問題点が露わになってきた。本研究所では、このような状況を越えて前進するために、一助となる道しるべを据えたいと考えた。そこで、おもに日本国内の世界史教育に向けてきたこれまでの活動枠を広げ、アジア各地の世界史研究者と教員の国際ワークショップを主催することを企画した次第である。具体的には、それぞれの「世界史」概念と教育の歴史、さらに教科書記述や諸々の制度（指導基準、カリキュラム、入学試験、教授法、教員養成のシステムなど）を含めて比較検証し、その結果を英文で刊行することを目指している。

今回のワークショップは第 1 部日本、第 2 部中国・韓国、第 3 部シンガポール・フィリピン・ベトナム、第 4 部インド・インドネシアに分けて行われた。まず事前に配布されていたペーパーの要旨説明が各国参加者からあり、それに基づいて全体討議を繰り返した。個々の論考の詳細については予定されている刊行物をご覧いただくとして、ここでは提示された豊富な情報の一部を整理紹介してみる。

すべてのテクストには発信者と受信者の立脚する視点が不可避的に織り込まれている。ことに教育の場の「世界史」においては、誰が誰に向けて語っているのかが、何にもまして明白に、その叙述の枠組みと内容を形成する要因であるだろう。「世界史」とはいいながら、発信者と受信者が場を同じくしているのは国民国家である。今回ワークショップ参加者のほとんどの国は列強による植民地化と独立を経て、さらにまた国家形態の変遷を経験している。そのため、まず宗主国重視だったかつての歴史教育（たとえばインドではイギリス史が中心にあり、ムガル帝国の存在はほとんど無視されたという）から脱し、自国史の再編成と導入が求められたようだ。その後、自国史とヨーロッパ中心主義の「世界史」とが並立しながらいわば点の知識としてあり続けるなか、1980 年代後半から強まるグローバリゼーションの影響のもと、徐々に自国史を世界史的視野のなかで相対化しようとする動きが現れ始めた。この大まかな流れは各国にほぼ共通しているといっていいだろう。

しかしいっぽうで、各国の「世界史」像と歴史教育は、アジアの歴史と文化の多様性を映してさまざまに異なる相貌を見せる。たとえば、マルクス主義史観を同根に持ちつつ、ベトナムでは「近代」（モダン）がフランスによる植民地支配から始まるのに対して、中国では第二次世界大戦終了後とされるといった時代区分の違いが指摘された。フィリピンの教科書では、長いスペインの植民地時代があったために中南米（特にメキシコ）とのつながりが深く、中南米の記述に重点が置かれる傾向があるという。また、アジア最大のキリ

スト教国である同国を東西の結節点と位置づけている。多民族国家として現在も国の統一を国是として掲げるインドネシアでは〈インドネシアとヨーロッパ〉、〈インドネシアと中国〉等々、インドネシアを主体として「世界史」が語られる傾向が強い。同様に、1965 年独立と歴史が浅い多民族・多文化国家のシンガポールでは、グローバリゼーションに対応する教育（ケンブリッジ国際検定試の導入など）と同時に、歴史教育を通してシンガポールアイデンティティーの確立をはかる記述が推奨されている。アジアにおいて「世界史」教育の先鞭をつけた日本については、明治以降の教科書の変遷について詳しい説明があった。検定では不可となった、上原専禄によるアジアや民衆の生活に関する叙述の比重を高めた教科書にも言及された（ちなみに検定制度は各国各様に存在している。ただ、インド、ベトナム、中国のように教科書は公の出版所のみが刊行する国や、執筆者が事実上政府認定の研究者に限られるケースなど、教科書作成の過程には差異が大きい）。現在の教育現場からは、北海道という「辺境」と世界のつながりを示す授業を通して、国民国家に基づく「世界史」を乗り越えようとする試みが参加者の関心を引いた（多民族・多言語の国家において、同様の試みを導入する困難性も指摘された）。

今回の企画は、あくまでカッコ付きの世界史を

第 1 回ワークショップに参加された方々

下段左から、Satyanarayana Adapa さん（インド）、Sunjoo Kang さん（韓国）、Thi Thuy TA さん（ヴェトナム）、Weiwei Zhang さん（中国）、上段右から、木村英明研究員、Agus Suwignyo さん（インドネシア）、吉嶺茂樹さん（北海道有朋高等学校教諭）、南塚信吾所長、Chelva Rajah S.N. さん（シンガポール）、Francis A. Gealogo さん（フィリピン）、関本紀子さん（ヴェトナム語通訳）

克服する道筋を準備する、知識と意見の建設的なやり取りが目的である。もちろん、ワークショップの際には、それに向けた議論もあった（たとえば、韓国の研究者は、国民国家の枠に収まらない、より広い地域史のなかで、諸現象の相関性を考える方法に触れた）。次回ワークショップは、本年4月にフィリピンで開催が予定されている。そこでも、各国の「世界史」と教育制度の相違に対する相互の理解をさらに高めていくことになるだろう。

「世界史の中の日本・日本の中の世界史」を求めて ――研究会「歴史家工房２１Ｃ」の発足

2014 年３月、「世界史の中の日本・日本の中の世界史」を探る歴史家の集団「歴史家工房２１Ｃ」が発足した。その狙いは、「日本史」と区別された「世界史」という見方を乗り越えて、括弧のつかない世界史のなかで日本における様々な歴史的事象を把握しなおすことを目指すことである。したがって、「世界史の中の日本・日本の中の世界史」にはこだわりがあって、「世界史の中の日本史」でも「日本史の中の世界史」でもないのである。世界史研究所としては、さまざまな面でこれを支援していくことにしている。

その趣旨は以下のとおり。

> われわれの存在あるいは生が、われわれを取り巻いて生起する世界中のさまざまな出来事や動きによって突き動かされ、方向づけられてきたこと、そしてそのような衝迫に対するわれわれのさまざまな反応が、われわれの存在あるいは生の内実を形づくってきたということ、このことは過去のどの時代についてもいえることであるが、それが特に目に見える形をとって現われるのは近代という時代である。
>
> 幕末・明治維新以来の日本の近代という時代は、われわれの存在あるいは生が世界史の動きの中にがっちりと組み込まれていくと同時に、日本という国家の鋳型 の中にしっかりと鋳込まれていく時代である。それは、われわれの存在あるいは生が「世界史の中の日本」という枠組から逃れることのできないものとなっていったということを意味している。一方で、野麦峠を越えて諏訪湖畔の製糸工場に働きに出ざるをえなかった女工たち、他方で、東京、下谷や四谷の「下層社会」に蝟集する以外なかった人びと、これらの人びとの姿はそれを象徴的に示している。
>
> このことは、逆の面からいえば、日本の中に世界中のさまざまな歴史的な出来事や動き

がもぐりこみ、浸潤しているということである。だから、われわれは日本の中にさまざまな世界史を見出すことができるのである。長い時代にわたって、独自の歴史と文化を育んできながら、近代という時代に「日本国民」とされた沖縄やアイヌの人びと、朝鮮半島に連綿として継承されてきた文化を維持したまま、日本の中に存在しつづける在日朝鮮人・韓国人、ハワイや南アメリカに送り出された移民あるいは棄民の二世、三世として日本に還流してきている日系の人たち、これらの人たちは「日本の中の世界史」をその身体性において表現する存在ということができる。

しかし、これらはほんの一例にしか過ぎない。それなりの努力をするならば、われわれは、いたるところに、「世界史の中の日本」「日本の中の世界史」を発見することができるはずである。

メンバーは池田忍、木畑洋一、久保明、小谷汪之、高澤紀恵、藤田進、南塚信吾、油井大三郎、吉見義明（五十音順）の９名である。３か月に一回程度の割合で研究会を持っており、成果は２、３年後に 10 巻シリーズとして出版の予定である。

世界史研究所では、折につけてホームページ上で、この「工房」の情報を提供していくことにしている。

（文責・南塚信吾）

RIWH アフリカ奨学基金第三期のご寄付のお願い

世界史研究所では皆さまの篤志に支えられて、2011 年度から「世界史研究所アフリカ奨学金」の制度を運営してまいりました。おかげさまで、2015 年の１月からは第三期奨学金給付が始まります。過去２回と同様、ナイジェリアのイロリン大学人文学部歴史学科および国際研究学科の学生の方が対象です。

つきましては、経済的困窮のなかで向学心に燃えるアフリカの学生を支える一助を皆さまにお願いしたく存じます。日本のコーヒー数杯分程度のご援助でかまいませんので、皆さまのお志をいただければたいへんにうれしく思います。

募金の送り先は以下のとおりです。期日は３月末までとなっております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

三菱東京 UFJ 銀行　渋谷支店

口座　普通預金

口座番号　0683412

口座名義　（特）歴史文化交流フォーラム

理事　南塚信吾

お知らせ

世界史研究所ホームページに関するお詫びとアドレス変更のご報告

昨年秋以降、サーバの問題から、世界史研究所ホームページが閲覧できない状態がしばらく続いておりました。皆さまには長らくご不便、ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

問題の抜本的解決のため、この度ホームページを別のサーバに移転することが決まり、現在サーバ移行作業に着手しております。

移行完了までの間は、仮の簡易ページを設置し、そこでホームページの運営を行っていくことをご通知いたします。既に本年 1 月から、以下の URL でホームページを再開いたしました。誠に恐れ入りますが、「お気に入り」「ブックマーク」等のアドレス変更をお願い申し上げます。

新 URL： **http://www.npo-if.jp/riwh/**

当面、簡易ページのみの閲覧となり、引き続きご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。移行作業が完了次第、新たな形式のもと、従来通りの運営を再開いたします。今後とも、当研究所ホームページのご愛顧を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2015 年 02 月 05 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）